

(御土史学習)

橋町の窯業の歴史

吉野千代次

(一) 日時 平成17年1月19日(水) 9:30~10:15

(二) 学年 橋小学校 5年1組 29名 5の1教室

(三) 主題 橋町のかめ作りと陶器づくりの歴史を研究する  
(時間不足の場合 ⑦橋の陶業は次回にゆずる)

(四) 準備 小形のかめ 写真図表類 大かめは橋公民館のものを事前に見ておく(病題)

(五) 指導過程

1) 導入。自己紹介(吉野) 敬老会(貝骨)のものおれ

・事前の現地見学の感想発表(丸田窯 飛龍窯 けいざん窯 赤絵座)

2) 本日の主題の確認

3) 展開

① かめの用途(何に使われたか)

・水かめ ・みそ・しょうゆの容器 ・穀物の貯蔵容器 ・便所のため・葬式の棺

・すり鉢 ・こね鉢 ・たこつぼ ・植木鉢など用途がひろい

② 大昔も焼きものはあつただろうか? — 弥生土器の写真提示

・弥生土器... 焼く温度が800°ぐらい 手ぬが荒い(上ぐすりなし、水を吸う)

・作り方が大きな進歩をしたのは? 秀吉の朝鮮出兵 → 帰る時陶工をつれ帰る

③ 武雄の窯業の進歩

・陶工 深海信伝(広福寺 別宗和尚に師事 渡来 → 武内に開窯 製陶を指導する)

・その他の渡来陶工 → 東川登 町内田に開窯(陶器) 白所用品、日用品、内田山は殿様のお狩場

(移転 約300年前) " かわ屋(かめ焼き) (窯の火で之ものが逃げる)

・西川登 弓野... 陶器(白陶工粘土)

西川登 小田志 陶器(白陶土粘土) かめづくり(粘土) (産地) (塩田で氷車づくり)

橋町上野(陶器(白陶工) かめ(粘土) 日用品 小かめ... 香奈平) 白陶土(熊本出陣) (それを買った)

\* 蓮池藩の成之(寛永16年) → 橋久門、塩田、橋野、不崩山 = 蓮池藩領 → 塩田 役所  
(1639) 366年前 (殿様は佐賀蓮池) で行政をた

・久門村志田に開窯(陶器)

" 東山に開窯(陶器) 約250年前 大かめ作りをはじめ → かめ作りの粘土 → 橋の粘土

橋町 武雄 後藤家  
佐賀 蓮池藩は言科藩  
↓  
粘土の細かい粒子

小野原の  
出土  
約400  
前  
01-10  
4  
E  
K

◎上野 大がめ作りのお願い → 作るの許可がない → 上野の <sup>叔の目的</sup> 小田李之丞さんの努力で許可

㊦ 大がめ (重い、大きい) → 作るのがむずかしい

・作る人が ロクロを廻せない → 二人の共同作業 (二人が気持を合わせると練習が必要)

・重い → 1日で作って1日干すことが出来ない → 3~4日 乾かしてから

・焼く時 → 窯が焼けてやわらかくなる → 下のオがしやがら → 作る時しりとりたたきしめる

↓  
製法 「たたきく」 → 内と外からたたきしめる

※ 橋の陶工たちは 分業による専門をきめ技術をとり 困難に打ち勝つて 優品をつつた

・そのため販路もひろがり (阪神、沖繩まで) 大へん繁昌した。上野の窯 (東窯 上窯 火口)

火の加減  
火の茶持  
の技

㊧ 橋所「かめ窯」の終り

終戦後ビニール製の容器が出来た → 軽くて取扱い → かめに代って使われた。(かめが売れなくなった)

昭和28年までに「かめ窯」はなくなつた → 今は 東窯 上窯 (かみかま) 火口<sup>の</sup>など 地区の名前が残るのみ

※ 小野原の古川窯 (土管工場) たけが残っている。

※ かめ窯の盛業の時 → 上野の戸数300軒 (ほとんどの家が窯で働いて収入を得ていた)

橋村への税金も多かった → 橋村の収入 → 村民のゆたかなくなるに役まつ

※ 橋のかめづくりの歴史 → 子孫に語りつづけてきもの

㊨ 橋所の陶業

○ 片白窯 → 血山 (昔の陶窯のあと) → 長崎自動車道と東福寺道の立体交差点の少し上の方

(昭和60年頃 県教委で発掘調査 → 今は陶片の散布も少ない)

・志田の陶工をやとい 白陶土は塩田から運が陶器も作った (陶片別紙写真)

・有田の陶器におかれ 閉窯 (開窯は明治30年約41年前)

○ 鳴瀬窯 西岸弁北のやかのの中に窯があつた。(今も陶片がたくさんちらばつている)

・志田の陶工をやとい 開窯した。(白陶土は塩田から) → 有田焼におかれ 閉窯

・鳴瀬窯の作品が 志田陶器資料室に陳列してある (開窯 明治13年) 約70年前

美しい食器 (鉢) である

㊩ 本日の学習のまとめ

※ 参考

七、業者の仕組と作業内容

(分業)

業者の仕組は販売にいたるまで、専業者の分業によりてなされている。

1. 窯方 || 製造業者の窯元のことを言い、原材料の仕入れ、生産管理、販売計画など一切
2. 細工<sup>さいく</sup>工人 || 甕、土管細工の職人
3. 荒<sup>あらし</sup>仕<sup>こ</sup>子 || 原料の粘土を練り、釉薬の調整と釉薬<sup>か</sup>刷<sup>け</sup>、細工人の助手
4. 窯<sup>か</sup>焚<sup>た</sup>き || 窯焼成中の火焚き
5. 馬方 || 水田より原土を搬入する者
6. 豫算山馬方 || 燃料の薪を搬入する者
7. 牛車<sup>ひき</sup> || 製品運搬入
8. 釜<sup>かま</sup>葺<sup>き</sup>手 || 登り窯の板屋根、藁葺の細工小屋の屋根を葺く者
9. 灰<sup>はい</sup>買<sup>か</sup>い手 || 婦人が農家から木灰、糞灰を買い集める者

右のように専業で従事している。

十一、製品の名称と価格

左の価格は昭和二十年八月一日付、佐賀県指令商第五五一号を以て価格統制額が設定されたものである。小売価格の統制額の佐賀県陶磁器工業組合の査定を受けて、その証紙をはって売らねばならなかった。当時の県知事は沖森源一氏であった。

甕の名称	容量	容 キロリットル量	生産者価格円	小売価格円
一本半立	五石入	九〇〇		
二本立	四石入	六五〇		
大四石入切	三石五斗入	六〇〇		
三石入	三石入	五〇〇		
大四石	一石入	一七〇	一、〇八〇	二、一八〇
中四石	八斗入	一四〇	九三〇	一、八一五
並四石	七斗入	一二〇	八三〇	一、六二〇
三石	四斗入	七〇	五四〇	一、〇五〇
甕の名称	容量	容 キロリットル量	生産者価格円	小売価格円
一石	二斗入	三五	二九〇	五六五
中二石	一斗五升入	二五	二三五	四六〇
並二石	一斗入	一七	一六〇	三五〇
大二斗入	八升入	一〇	一五〇	二九三
中天水	五升入	八	一二〇	二三五
大天水	三升入	五	七五	一四六
並四石便	四斗入	七〇	三五〇	六八〇
紅鉢摺鉢	径二尺		三八五	七五〇
"	尺七寸		二五〇	四八八
"	尺五寸		一七〇	三三三
"	尺二寸		一三五	一八六

## 十二 橋 町 内 の 窯 跡 地

明治時代前の幕藩体制間の事は、窯窯については文献なく口伝えのみで詳まびらかではない。やがて江戸時代から明治維新の大業が成つて文明開化の時代を迎えた。日清、日露戦争、日韓合併と国威愈々たかまつて、<sup>それ</sup>につれ国内産業も急速に発展を辿つて、鑒類にしても需要も伸び販路も拡がり好況に入つた。これまで旧村内本登り窯一ヶ所で焼けていたのが、明治時代に入つてから、独立の個人窯、共同窯が山麓の適地に次々に新しく構築されたのである。年代順に挙げれば次の通りである。

- |              |                        |                 |        |
|--------------|------------------------|-----------------|--------|
| (1) 上野本登り窯   | 弘化以前 <small>六四</small> | (7) 小の原旧窯       | 明治三十六年 |
| (2) 上野玉島窯    | 明治初期頃                  | (8) 小の原窯(形右エ門窯) | 明治四十四年 |
| (3) 芦原鳴瀬窯    | 明治六年                   | (9) 檜崎窯(北海道窯)   | 明治四十五年 |
| (4) 鳴瀬窯 (磁器) | 明治十三年                  | (10) 上野石炭窯      | 大正五年   |
| (5) 片白窯 (磁器) | 明治三十年                  | (11) 小の原土管窯     | 昭和二十七年 |
| (6) 上野新窯     | 明治三十年頃                 | (12) 小の原石炭窯     | 昭和三十三年 |

### (1) 上野本登り窯

本登り窯は上野「釜古賀」にある。創業年代は確かな事は不明であるが、今から三百有余年前、志田東山から韓人の陶工がここに来て焼き始めたのでであると伝えられている。

今より百五十年前、この地の野田亀右エ門(弘化五年九月六日卒五十二歳)が、ここで焼き始め二代目野田伝蔵―野田勝次郎―野田卯八―野田伝と昭和二十六年廃窯に至るまで百五十年間実に五代続いた窯元である。亀右エ門の前は、誰が焼いていたかと調べてみれど記録見当たらず解からない。大正五年までは登り窯十七室からなつていて、明治中期頃から半数の室を、田代代四郎、田中又四郎、藤武利作、東島佐一、岩永利八、山口秀吉氏等と、共同使用